
my sweet sweet darling

桐原奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

my sweet sweet darling

【Nコード】

N3241G

【作者名】

桐原奏

【あらすじ】

突然先生に

抱きつかれた私

これからどうしたら

いいんだよっ！

S w e e t 1

ソレは突然おきたんだ
急に真っ暗になる視界
背中に感じる自分のものではない
別の人間の体温
爽やかなシトラスの香りが
鼻腔をくすぐる

ドンっ

私は訳も分からず
そいつを突き飛ばして
逃げ去った…

事の起こりは
私が体育の補習のために
1 人体育館で練習をしていた時に

起こった

元々体育が苦手ではない私だったが
どうも縄跳びだけはできず

そんな私につきっきりで

1人体育教師をつけると

言われたのだ

誰がいいかと聞かれた私は
割と仲良くしている1人の
体育教師の名を言った

「ああ真山先生ね？」

彼なら若いし

教え方も上手だと評判だから
きつと一ノ瀬さんも上達するわっ！」

一歩間違えるとイヤミにしか

聞こえないセリフを堂々と

言つてのけた私の担任は

じゃあ頑張つてねと爽やかな

笑顔を残して私の前から消えた

大変憂鬱だが仕方がない
縄跳びができない自分が

悪いのだ… 渋々と重い足を
引きずり体育館へと向かう

「おおっ！」

「一ノ瀬っ！来たなあ」

ウツ

爽やかだ爽やか過ぎる

「ええまあね…」

「お前俺のこと指名してくれたんだろ？
先生嬉しいよ！」

「だって先生以外の人にしたら
怒るでしょ？」

「そりゃあそうだろ！
だって俺一ノ瀬のこと
スキだしー！」

ケツ

うそくせえ笑顔…
なんだそのセリフ！

「先生…
早く始めましょう…」

「そうだなっ！」

それから30分ほど私は
練習をかさねた
しかし一向にできない
私に痺れを切らした先生は
急に私の後ろに立つと
ギュツと私の手を握った

「ほえっ!?!」

「いいからじっとしてる
いくぞっ…!?!」

ピョんっ

と 飛べた？

そのあとピヨんピヨんと
先生と一緒に飛ぶ

「わぁー！
凄いつ！」

.....

んっ？

「せんせえ？」

「駄目だ…我慢できねえ……」

今まで聞いたこともないような
低い声で彼は囁いた…

ソレは突然おきたんだ
急に真っ暗になる視界
背中に感じる自分のものではない
別の人間の体温
爽やかなシトラスの香りが
鼻腔をくすぐる

ドンっ

私は訳も分からず
先生を突き飛ばして
逃げ去った…

「待つて！
奏っ！」

ぐいっと勢いよく腕を引かれた
私は体制を崩して
先生の上へと馬乗りになった

「ハアハア…

危ねえなあ……」

「嫌っ！

離せっ……！

馬鹿やるっ……」

「やだ

離さない

だって離したら逃げるだろ？」

ハア！？

「当然でしょうっ！」

「なあ奏……

俺……お前が好きだ……

そうやって俺に怒ってる

目も生意気なことを言う口も

全部愛しいんだ……

だからっ……」

……

「……っつ……」

ごめん……

まだ突然だし……

分かんないよ……」

「あつ……そうだよなあ……

ごめん……

でも気持ちだけでも知って

欲しかったから……」

バツ

「とっとかくもう

帰るっ！」

私はそう言って

その場から逃げ出した

……

……ふう……

家に帰り風呂につきりながら

私は考えた

あれはいつたいたんだったんだ？

先生が私を好き！？

まだ信じられない

私は生ぬるい湯につかりながら
回らない頭をフル回転させた

よし…

もうあいつとは関わらない！

うちの学校は生徒数も多いし

きつと大丈夫だっ！

一抹の不安はあるものの

自分で決めた計画に太鼓判を押して

私は深い眠りについた…

S
W
E
E
T
1
E
N
D

Sweet 2

```
- - Tf1g3NrN
Content-Type: multipart/altern
ative; boundary="e8Q7nXm8"
- - e8Q7nXm8
Content-Type: text/plain; char
set"iso-2022-jp"
Content-Transfer-Encoding: 7bit
```

.....ふう

昨日はよく考えずに
寝てしまったが1日寝た
冷静な頭で考えるとやっぱり
大変な事態なんじゃないのか!?

「どつしよつ」

「んんっ!?!」

「奏ちゃんお悩み中かじゃ?」

あれ…

私無意識のうちに声に出してたんだ…

「んーちよつとねえ…」

まあ康平にはちよつと…」

康平は家のお隣さんだ

小さいときからずっと一緒に

今も小中高とずーっと一緒に

康平は少し天然なところも

あるが可愛らしい顔立ちを

しているため昔から女の子に

モテていた

「それなら聞かないけど

俺はいつだって奏の味方だから」

眩しい笑顔で康平は言った

確かに康平なら信用できるし

どうしようもなくなったら

相談してみようかなあ…

「うんっ！
分かったありがとう」

.....

キンコーンカーンコーン

授業の終了をつげるチャイムが
鳴り響いた

ふう……
今日も1日長かったなあー

「かーなでちゃんっ！
あのねえ里奈かなちゃんに
伝言頼まれたんだあー！」

そう言って友達の里奈が
走ってきた

里奈は小さい身長に
大きな目が特徴の可愛い子だ

「ありがとう里奈
だれからの伝言？」

「中尾先生から
今日の放課後な体育準備室に
来ることらしいよーん
ちなみに逃げた場合家まで
いってやる！だそうです！」

.....
ハア！？

「チツふざけんなあの野郎！
ぶん殴ってやる！」

S w e e t 3

ハアハア……
くそつたれっ！

バンっ！

「いったいなんの用っ！？」

「おーきたなあ」

ヤツはずっと笑っている
それが尚更私の神経を
逆なでする

「なんでニヤニヤしてんのよっ！」

「んー？」

そりゃあーノ瀬が呼んだら
俺んどこ来てくれたからじゃん」

.....カアアア

私は顔中が暑くなるのを感じた

「あつあんたがっ

あんたがほとんど脅して

来させたんじゃないっ!

私は来たくなかったのっ!

「ふーん……

昨日は俺の上に馬乗りにな

なっってたくせに……」

先生は突然立ち上がると

私の耳元で囁いた

「ふあっ? ひっ人聞きの悪いこと言うなっ! 変態っ!」

「んあー?

もしかして今……感じた?」

ボンツ！！

私は顔から火が吹き出しそうだった

「つつ……！！」

かっ感じてっなんかっないっ！！」

私は大声で喚いた

「声がかいっ！！」

慌てて先生が私の口を抑えた

「ひやめろおふえんひやいつー

ひょうひいくひひんかひに

うつひやえひえやるうー！！」

（やめろー変態っ！

教育委員会に訴えてやるー！）

「んったく……

ちよっと黙って……」

先生はそう言っ
て私を
ギョツと抱きしめると
私のおでこにキスを落とした…

チュツ………

「ほあああつ！？
にやにすんだー！」

トントントントント…

「おーい奏ー？
いるのー？
開けるよお
」

ハッ！

康平だ…！

今日は一緒に帰る約束を

してたんだっ！

ヤバいこの状況！

どーする私っ！

s w e e t 3 E N D

Sweet 4

「開けるよー?」

ヤバイヤバイヤバイー!?

「はなれつろおっ!」

「んー?

なんで慌ててんの…?」

……ヤダ……」

ガララっー

ガタンッ!

「つつう…！」
つなにしてんだよ！
奏から離れろっ！」

バキッ！

「痛って…」
オイオイ先生殴っちゃだめっしょ？」

バキッ！

「お前も生徒殴ってんじゃねーよっ！」

バキッ！
バキッ！

準備室に響く殴り合いの音

いやだいやだいやだ
やめてよっもおやめてっ！

康平の拳が先生の鼻に
あたる瞬間だった

「こおへいっー！
やめてっ！」

私は叫びながら
走り出した……

ああ真っ暗だ
なんで私あの時康平じゃなくて
先生を庇ったんだろ…？
アイツなんかだいきらいなのに…

「……………なっ……………
かなっ……………奏っ！」

「ふあっ？

「こっ…どっ？」

私の頭のうえは真っ白だ

「覚えてないの？

奏は俺がアイツを殴ろうと
したところに飛び込んできて
俺の拳があたっただよ？」

じゃあここは保健室かあ…

「奏…

ほんとにごめん…

大丈夫じゃないよね？

痛くない？」

康平が泣きそうな顔で

私に謝っている

「だーいじよぶだよ！

それに康平のせいじゃないしっ！」

私は笑顔で顔の前でVサインをした

「でもっ…！」

かなは女の子なんだよ？

それに…なんでアイツなんかを

かばったんだよ…？」

そう言っつて康平は見ている

こっちがツラくなるくらい

切ない顔と声で訴えてきた

「私だつて分かんないよ

気づいたら体が動いてたの…！」

「奏…もしかして
アイツと付き合ってたの？」

「んなわけないじゃんっ！
なに言ってるのよー」

「ねえ…かな…
こんな時にどうかと思うけど
俺…奏が心配なんだ…
だって…俺…」

「えっ！どうしたの突然？」

まさか…
違うよね？

S W E E T 4 E N D

Sweet 5

「……………俺っ……………
奏のことが……………
すっ!」

ガラガラー

「一ノ瀬っ!」

先生が見たこともないような
顔で私のところに走ってきた

「せんせえ?」

「良かった…」

意識が戻ったんだな…」

先生は床に座り込んだ

「ふはっ！

情けねえ…腰が抜けた…」

先生は破顔と言う言葉が
ぴったりの顔を私に向けた

「俺…馬鹿みただけど

このまま一ノ瀬が目覚まさなかったら
どうしようって思ったら

もうダメで…ハハッ

教師としてダメダメだな…」

先生はふうつとため息をつきながら
そう呟いた

「心配かけてごめんなさい…
康平も先生もごめんなさい…」

私はなぜか分からないが
泣きたい気持ちになった
2人に心配をかけた
自分が情けなくなつたからだ

「いや…反省は俺が一番しなきゃ
ダメだから……………」
あつ？もうこんな時間か…
—ノ瀬家まで送るよ」

時計の針は7時を示していた
先生はそう言つて帰り支度を始めた

「あつ…
大丈夫です…
自分で帰ります！」

「いや…それくらいさせてくれよ…
最近は何々と物騒だし…」

「でも…」

「奏、送ってもらえよ
先生もこんなことあったんだ
下心なんてあるわけないし」

康平はそう言って
先生を睨んだ
牽制のつもりなのかな？

「ちょっと康平…！？
なに言ってるの！」

「あはは厳しいなあ

一ノ瀬のガードマンは

流石に俺もそんなことはしねえよ。」

先生も笑っているが

目がまったく笑っていない

私は早くこの穏やかじゃない

空気をどうにかしたくて

帰り支度を始めた

「じゃあせんせえ？

送ってくれますか？」

「お望み通りにお嬢様」

先生は茶化して言った

S
W
E
E
T
5
E
N
D

S w e e t 6

とりあえず先生と帰ることになった
私は帰り支度をして先生の
車に乗った

「なあーノ瀬？
藤堂とはいつからの
付き合いなんだ？」

藤堂とは康平のことだ

「えっと…生まれる前から？」

「はい？」

どういう意味だ？」

「えっと…
うちのお母さんと
康平のお母さんが幼なじみで
生まれる前からずっと一緒なんですよ」

「あーそうなんだ…
アイツって…昔からお前に対して
ああなの？」

……
ああとはどっいう意味だ？

「ああって…？」

「いや…あの…さあ
ほらー…なんて言うか…
凄くーノ瀬のことを

大事にしてるって言うか……」

「……………そうですね？
普通だと思いますが……」

「ふう……………」
藤堂も可哀想だな……………」

先生は憐憫の眼差しで
遠くを見つめていた
……………？
どういう意味だろう？

「なあーノ瀬？
こっちであってるか？」

.....

「.....」ノ瀬？」

私はさっきから何故か
先生が私の名前を名字で
呼ぶたびに私は心がざわつく...
昨日は奏...って呼んでたのに...

.....！？

私.....
何で先生に名前呼ばれて
ないだけで拗ねてんの！？
意味分かんない！

「……………いちのせつ！
聞いてんのかよっ？」

気がつくと先生の顔が
私の顔を覗きこんでいた

「っつ……………！
ちよっとっ！近いからっ！」

私は体温が急上昇するのを
感じた……………

S W E E T 6 E N D

Sweet 6 (後書き)

皆様初めまして！桐原奏と申します！ この度は私の拙い小

説を読んでいただき 大変感謝しています！

特に今回は大変続きが遅れたので

そのことについてお詫びをさせて もらいます

m () m それ

と…もしよかったら感想など いただけると大変嬉

しいです！ では今後ともよろしく願いしま

す！

sweet7 (前書き)

前回のsweet7でなんと1000HITだったんですよっ(´・`・´)
私の拙いですが「my sweet sweet darling」
をよろしく願います！つきましてはsweet5と6の康平サ
イドバージョンをupしよーかと思っっているのですがどうでしょう
か？もし読んでみたいと思われる方がいらっしやるようであれば感
想でお伝えいただけると大変ありがたいです(´・`・´)ではswe
et7どうぞお楽しみ下さい(´・`・´)！

s w e e t 7

「…ちよつとっ…！」

近いつて言つてんでしょ…！」

「……………なあ

もしかして…自惚れかもしんねえけど
俺のこと意識してる…？」

カアアアア！

私は体温が急上昇するのを感じた

「バツ…！」

そんなわけないでしょっ…！」

「ふーん…

じゃあ何で俺が近付いたら
逃げてんの？顔も赤いし…！」

先生はそう言って
私の頬にそつと触れた

パンツ！

「うつ自惚れんじゃないわよっ！
私はべつ別にアンタなんか
意識してないからっ！」

私は先生の手を払い
矢継ぎ早に言った

「ふはっ…！
かーわいっ…ヤベエ
俺…今すっげえ嬉しい！」

そう言つて笑つた先生の
顔が思いがけず可愛くて
私の心臓はトクンと小さな音をたてた

「だから違つて言つてんでしょ！」

私が先生に腹を立てている
うちに車は私の家の前の曲がり角に
差し掛かつていた

「おー着いたなあ…
先生としてはもう少し
奏といたかつたんだけどなあ…」

ドクンッ！

先生が「奏」と言っただけなのに
私の心臓はうるさいぐらいに
早鐘を打つ

「こっこっちは願ひ下げよう！」

「わお！

冷たいなあまったく……

………なあ奏ちよっと……」

私は車から降りかけていた
体を先生のほうへと向けた

「なに？………つつう…！？」

………
チュ
………

先生はあろうことか
後ろを振り向いた私の
頬にキスをしたのだ

「つつう………！」

こんのっ 変態野郎！」

「ははっ！

ごちそうさま

じゃあまた明日な……？」

「とっとと帰れバカやるつーー」

私の声は冬の空へと
消えていった…

s w e e t 7 E N D

バツ！

外は冬の清々しい空気で
満たされている

しかし私の心は一向に
はれることは無い

昨日のことを思い出すだけで
体中の血液がドクドクと
脈打ち顔が赤くなるのが分かる

「うわーっっっっ」

「奏っっっっっっっっ」

下からお母さんのどなり声が
聞こえてきた

「ふう……………」

とりあえず学校行こう……………」

休みたい気持ちもあるが
母が許してはくれないだろう

「いつてきまーす……………」

……………」

「あつ 奏っ！おはよう」

校門の前で康平が手を振っている

「おはよう…康平…」

「あれ？元気ないね？

どうしたの？……

もしかして……あいつ……」

ボツ！

昨日の出来事を

思い出しました体温が急上昇した

「奏…その顔……」

あいつなにやっただんだよっ！？」

「なっなんでもないからっ！

大丈夫っ！元気だよ？」

「絶対嘘だっ！」

「あーもうっ！」

「なんでもないからっっ！」

「何が何でもないんだ？」

「この声は……」

「ぎゃあーああああー！」

私は猛ダッシュでその場から
走り出した

「うわっ!?!?
なんだアイツ…!」

「ぷっ!
嫌われたんじゃないんですか?」

康平が憐憫の眼差しで
先生をいちべつした

「奏ー!
待ってっ…!」

「まじかよ…!」

S
W
E
E
T
&
F
I
N
D

S
W
E
E
T
9

ダ
ダ
ダ
ダ
ダ
ダ
ダ
ダ
ダ
ダ
ー
ッ

バ
ン
っ
!

「
や
べ
え
.....
」

「あーおはよお
かなちゃん」

里奈がぼやんとした
笑顔でこっちに手を振っている

「ああおはよう里奈…」

「どおしたのー？
元気ないよおかなちゃん？」

「いやちよつと全力疾走
したからさあ…」

「そおなんだあー！
お疲れ様あー！」

「ああありがとう……」

「おい奏ー！

俺を置いてくなよー！」

「あつ康平……

ごめん……忘れてた」

「ゲッサーー！

俺今超傷ついたあー！」

「ほえー？

なんか藤堂君

テンション高くないー？」

「いやーやつぱり分かる？

俺今ちょっといい気分なんだよ」

そう言って康平は
満面に笑みを浮かべた

……正直言って
かなりウザイ……

「ふふっ
かなちゃん周りの空気が
くろおいいー」

ピンポンパンポーンー

「2年A組

一ノ瀬奏至急体育準備室に
来なさい繰り返します……………」

「ぎえええええあああー」

「かなちゃん最近呼び出しが
おおいねえー」

「チツ

あんのジジイまあだ
奏にちよつかいかけて
やがんのか！一回絞めてやる！」

えっ……………
それはマズい……………
康平と先生のことだ
また殴り合いになったら
次はどうなることか分からない…
仕方ない……………

「あっ……………」と
康平……………ちよつと
私行ってくるわ!」

「えっ……………ちよつ…!かなーっ!?!」

S
W
E
E
T
E
N
D

S w e e t 1 0

.....ふう.....

落ち着け自分！

私は体育準備室の前で
気持ちを落ち着かせていた

大丈夫だ
距離を保ちつつ奴と
話せばいいだけだ

.....よしっ！

ガラガラーっ！

「失礼します……………」

「おっ！来たなー
えっと呼び出した
理由だけどなあ…
ーノ瀬さあ……………」

キター！

「まだ縄跳びのテスト

合格してないだろ！
まだなのー瀬だけだぞ！」

「へっ！？」

私は思わず
素っ頓狂な声を上げてしまった

「なんだよ？
なにか他のことで
呼び出されることってあったか？」

その後も先生はテストは
いいからレポートを提出しろ
だとか至って普通のことを
言っていたが私の耳には
届いていなかった

おかしい……………！
先生にあんな態度で
接したのに何も言わないなんて！
絶対なんか企んでる！

「ちよつと！」

他には言うことないわけっ！？」

「いや？」

特にないけどなあー」

「やつやせ我慢は体に
良くないのよっ？」

「なんの話だよ？
皆目見当もつかないなあ」

コイツっ……………！

確かに朝は先生を見て

奇声をあげてしまったが

昨日私の頬にあらうことが

キツキスをしといて

その態度なのっ……………！？

「あっあああなたっ！

昨日のこと忘れたの！？」

「んんっ？

きのーのことー？

はて？何だったかなー？」

シネっ！

変態ジジイっ！

私が頭の中で悪態を
ついていると

先生が私のよこに立った

「ちよつちよつと！
近いっ！」

「んー？
顔が真っ赤で林檎みたいだ
かーわいっ！
ーノ瀬もしかして
昨日のこと意識してくれてんの？」

「はああああ！？
ばっかじゃないの！
んなわけないでしょっ！」

「ほんとーノ瀬は可愛いよ
朝まるで脱兎のように

逃げられたからもう嫌われた
のかなー？とか思ってた……
でも放送したら来てくれたし
さっきだってこっちが普通に
接したら接するほど
自分から話を振ってくるし
もしかしてあんまり
嫌じゃなかったのかなとか
思っちゃうよ？
俺結構自意識過剰だから
うぬぼれちゃうよ？」

そう言った先生の顔が
思いがけず真剣だったから
私は何も言えなくなってしまった

……私まさか
本当にイヤじゃなかったの？
そつえば一度も気持ち悪い
なんて思わなかったかも……
……いやいやっ！
ビックリしてよく
分からなかったただけだっ！

「かつ勘違いしないでよっ！」

「ふはっ！」

それだけかよっ！

やっぱり可愛いな奏は」

先生はそう言って

ギュッと私を抱きしめた

「ほぎゃあほへひゃあああ！」

「あっはっはっは！」

なんだその色気のない声！

忘れてんじゃねーのか奏っ！

俺はお前のことが好きなんだ
あんまり無防備だと
襲っちゃうぞぞ？」

先生は爽やか
スマイルで変態発言をした

「あつあんななんて
教師失格よっ！！
あんまり私のことなめないで！」

私はそう言って
先生の弁慶の泣きどころに
蹴りを入れて
準備室から出た
後ろで悲鳴が聞こえたが
先生の普段のセクハラ
ぐわいからいつても
あれくらいは当然だと思い放置した

S
W
E
E
T
1
0
E
N
D

S w e e t 1 1

.....ガラガラー

「失礼しましたっ！」

.....ふう

あああああ！

やってしまった.....

なんだあのセクハラ教師.....

せっかく関わらないで

おこうと思っていたのに.....！

しかもいやじゃなかったんだろ

とか意味の分からない事まで

いいやがって！

私は舌打ちをしながら
教室に戻った

「かなつ！
大丈夫だった！？」

康平が私に
走りよってきた

「だいじょぶだったよ
なんか体育の補習のことだったし」

「ああそうなんだ…
良かった…」

そう言った康平の顔が
本当に安心していて
私はなんだか
笑ってしまった

「心配しすぎだよ！」

「そっかな…？
でもなにもされなかったんだ！
良かったあ」

「えっ………
なにも………」

私は先生に抱きしめられた
ことを思い出して
体中の体温が急上昇した

「かな………？
まさかまたアイツに

なにかされたのか!？」

「ちつ違うよっ!

なんでもないからっ!」

私はなおも話しかけてくる

康平を振り払い

屋上に向かった

.....ガチャ

屋上は私のお気に入り場所だ

みんなは風が強いからと

あまり近づかないので

ほとんど貸切状態だ

少し力を入れると
手折れてしまいそうな
白く細いからだに
腰まで伸びた
ウェーブがかった
ブラウンの髪に
金色と茶色を混ぜたような
小麦畑色の瞳をした
女の子だった

……えっと

あの子はたしか……

転校生の……

北條斗羽さん……？

「誰かいてるん？」

……ヤベッ！

「あはは…
綺麗な声だなんて思って……」

「自分はA組の……
一ノ瀬さんやったかな？」

「そうですー…
でも私の名前……」

「なんで名前知ってたのだった？
そりゃあ自分有名人やん」

「えっ……！？」

「知らんのか？
学年一番藤堂君と
橘さんをはべらしとる
女帝一ノ瀬奏ゆーたら
この学校で知らんやつ

いてへんで」

北條さんはやれやれと
いった感じで爆弾発言をした

s w e e t 1 1 E N D

s w e e t 1 2

北條さんから衝撃発言
を聞いた私は啞然とした

「っ……………はあ!？」

私が里奈と康平を
はべらせているって!?
2人は友達なのよ!？」

「そんなん言われたからって
知らへんわ…
そもそも自分もあかんねん」

「なにが!？」

「いやそやさかい
自分の顔とか…」

「そりゃあ北條さん
みたいに綺麗な顔じゃないけど
それが原因なの!？」

「自分それ…本気で
ゆーてんのか…?
その顔で…?」

「ぐっ…いくらなんでも
酷い…!」

私は半泣き状態で
走り去った

「あの子結構おもしろいやん…」

ガラガラガラーツ!

「こーうーへーいーっ!」

「わあっ!?!?
かなっ!?!?どうしたの?」

「ねえ康平?
私の顔てそんなに
不細工かなあ?」

「……………は?」

その瞬間の康平の
顔をまさに鳩が
豆鉄砲をくらったようだった

「……かなは…物凄く
綺麗……だよ……」

「はっ！？なんて？」

「かなは凄く綺麗だって
言ったんだよ！
その長い髪もだし
意志の強そうな大きな瞳も！
背は低いけど細くて
でも俺はかなは綺麗だと
思うけど……でも
かなの中身の方が
好きだよ……
見た目は可愛いんだけど
中身は凄くしつかり…
してて……
って！俺なに言ってるだろ…
ごめんっ！」

そう言っつて康平は
どこかに走り去っつて行っつた

「えっつ！
ええっつつつつ！？」

「里奈はあかなちゃん
はじょおつさまみたいだ
なあっつて思っつてるよあ」

「なんでた！
何故だああああ！」

私の叫びは虚しく
教室に鳴り響いた

S
W
E
E
T
1
2
E
N
D

「…あああああ！
やってしまったあ！！
藤堂康平一生の不覚！」

あれじゃあかなに
告白したようなものじゃないか！
かなにはもつと
相応しい場所で
いい雰囲気の中告白
するつもりだったのに！
俺の17年間の苦労が
水の泡だああああ！

康平が1人屋上で
悩んでいることなど
知らない私は教室で

放心状態だった

「かなちやあん

元気だしてよお

大丈夫だよお！

りなはかなちちゃんの

じょおうさまみたいなのこ

だあーいすきだから」

「里奈…それは

誉めてるの……？」

しかし康平は

言い過ぎだろう

私の顔が綺麗なら

周りが不釣り合い

とは思わないはずだ

やっぱり康平の意見は

昔から一緒だから

欲目のようなものだろう

「ふう…

頭がごちゃごちゃだ…
少し外で頭冷やして
くるわ……………」

「だあいじよぶ？
里奈もいこおか？」

「大丈夫だよ」

私はふらつく頭を
抑えて教室を出た

「少し…保健室で
休もう……………」

保健室に向かつて
いると前から
先生がやってきた

「うげえ…」

「えっ…ちよひど…
うげえはないだろ…」

「どないしたん亮にい？」

「ああ斗羽
なにもないよ」

斗羽!?
亮にい!?!?
どつゆつこと!?!?

「えつと…
じゃあ私もう
行きますから…」

「えっ…
ちよっ待てよ!」

パンツ！

「離せつ……！
気安く触んな！」

私は先生の手を
振り払って
走り去った

「くそつ……！
斗羽ごめん！」

「あつ……
亮にい……」

……
……
「なんやあれ？
せつかく亮にいと
2人やったのに……」

ガララッ！

私は保健室に
駆け込んだ

「はあ…はあ…

先生…

少し休まずて下さい」

「あら？

いいけど先生いまから

ちよつと用事が

あるからここ

空けるわよ？」

「分かりました
大丈夫です」

私はもぞもぞと
着ていた制服の
タイを外して
消毒液の匂いの
する布団へ
もぐり込んだ

ふう…

なんでさつきは

あんなにイラついたんだ？

ただ北條さんが

アイツと親しそうに

しているのを

見ただけなのに…

北條さんがアイツを

亮にいつて呼んだ

瞬間お腹の中が

真っ黒になった

ような気がして…

……………

まあなんでもいいか

いまは休もう…

s w e e t 1 3 E N D

S w e e t 1 4

.....

ああ、なんで私
さつき、逃げ出したんだ...
別にあいつが北條さんと
どんな関係でも私には
関わりのないことなのに...

...バタバタバタ！
ガラガラッ！
シャーッ！

「チッ！

...るっさいな

保健室は静かにしろ...よ？

.....っ.....なにしてんの?」

「奏っ！

ここにいたのか！
探してたんだぞ」

「はあ？別にあなたに探される理由なんてないわ」

「……………ねえ

奏怒ってるよね？」

「なに言ってるの！？べつ別に私が怒る理由なんてなにもないわよっ！」

「…ふーん…そうかあ…」

「なっなによ！」

「あのさー俺と斗羽だけど

……………

ただのいところだから！」

「……………えっ？

……………いところ？」

「ああ

斗羽の母さんと

俺の母さんが姉妹なんだ

……………奏？」

いとこ…

いとこだったんだ…

確かに雰囲気とか

似てるところもあるかも…

……………よかった…

……………よかった！？

なにがっ！？

「…よかったなんて

私…どうかしてるな…」

「かーなーでー？」

「ちっ近いのよっ！
離れなさいっ！」

気づくと目の前で
先生が私の事を覗き込んでいた

「あはは！」

顔真っ赤だな！

…俺と斗羽がいとこで安心した？」

「……………っっ！」

自分でもとっさに反論
できないくらいに凶星だった

「凶星かー！
奏がヤキモチ
焼いてくれるなんて！
やべーすっげえ嬉しい」

「はあああ？
じっ 自意識過剰よっ！」

「へえー…」

ドンッ！
先生が突然私をベッドの
壁に押し付けた

「…っ！？」

「ねえ…
俺は奏のそうゆう
気の強いとかは好きだ

でも…少しぐらい
素直になれよ…」

先生の指がゆつくりと
私の耳を撫でる

「ひあッ！

…離せバカっ…！」

「ヤダ」

先生の指が耳から
頬に…そのまま唇を
親指でゆつくりと
撫でられる

私は心臓がはちきれんんじや
ないかと思うほど
胸の鼓動が止まらなかった…

∴ S
W
E
E
T
1
4
E
N
D

s w e e t 1 4 (後書き)

1年振りの続き投稿です
毎日見に来てくださった方
お待たせしました(´・`・´)
また私なりのペースで
投稿したいと思います
これからもお願いします^-^

・
・
・
心臓の音が
うるさい・・・

「やっ・・・!!
離しなさいよっ
「・・・

「だからイヤだ」

「つつ・・・
ふ・・・う・・・
「・・・

「可愛いな

・・・なあ・・・

キスしていい・・・？」

先生のいつもとは違う

真剣な目と

私の唇を撫でる指の

せいでほんやりとして

思うように頭が動かない

鼓動が耳にうるさい

くらいに響く

「ふあ・・・？」

「・・・つつ・・・！」

「・・・やべえ・・・」

「・・・チユ・・・」

先生のくちびるが
私の額に……

「……あ……」

「おいおい……」

奏……

色々ヤバイよ……」

「……おい……」

「……？」

ゴンっ!!

「う・・・わー！
いつ今キッキスしたな！」

「いたあ・・・
頭突きって・・・
しかもキスって
おでこにチューじゃん・・・」

「うつうつるさい！
変態教師っ!!
次、私に・・・
いついやらしいことをしたら
ただじゃおかないからなっ!!」

「ぶはっ！
いやらしいことって・・・!!
やっぱ奏は可愛いな」

「うつうつるさい！
いいかげんにしなさいよっ!!」

「はぁーい・・・」

「もう話しかけないでよねっ！」

「それはやだ！」

「この変態教師ーっ！！」

ガラガラーっ
ピシャン！

・・・
「いまの・・・なんやねん・・・
亮にいと・・・」
・・・一之瀬さん・・・？

S
W
E
E
T
1
5
E
E
D
N
Z

「・・・のうたうた」

s w e e t 1 6

…ハアハアハアハア

まだ鼓動が鳴り止まない

心臓の音が鼓膜を破るかと

思うほどにうるさい

なぜか涙がこぼれた

「…なん…で、涙？」

自分でもぐちゃぐちゃな

思考回路に追いつけず

ヒートアップして爆発した

…「…ふう、危なかった…」

「なにが危なかったんや？」

「えっ！？斗羽っ！？」

お前いつからここにっ？」

「ついさっきや、そんな

ことより…亮にい…？」

「あーっ…やっぱり見てた？」

「当たり前や…でっかい声で

わあわあ騒いでんねんから」

「…俺が…」

我慢できなかつたんだよ

ほんとは卒業するまで

待つつもりだったんだ…」

「えらいご執心やなあ

付き合ってるわけやない

風に見えたんやけど…」

「あははっ

全く相手にしてもらえないよ

最近やっと、心を開き

はじめてくれてたんだけど

…これでまた逆戻りだ…」

「…ツチッあの女っ…」

「えっ？」

「なんでもない、

私はいつでも亮にいの

味方やさかい、

なんでも言うてな」

「ありがとう…」

斗羽はほんと自慢の

いところだよ」

「大袈裟やなあー

そろそろ昼休みや

お弁当、亮にいの分も

作ってきてん！一緒に

食べようやっ」

「よっしゃ！斗羽の料理

好きだから嬉しいよ！

斗羽はきつといい嫁さんに

なるだろうな！」

わしゃわしゃーっ

「やめてや、髪型

崩れるやんかー」

「あははっすまんすまん」

…バカ亮

あんたの嫁になるために

料理もめちやくちや

練習したんや…

鈍感すぎるのは罪やで…

しかもちよっと目離したら

他に好きな女やって？

…喧嘩うつてるんか

あんたがそんなんやったら

こっちも行動起こさせて

もらっわ…っ

「亮にいー

お茶入れてくるわ！」

「ありがとう

保健室の先生いないみたいだし

お湯借りようか！」

「…づん…そっちな…」

…あほやな完璧に

油断しきってるわ

…既成事実

つくらせてもらおうぜっ

s w e e t 1 6 E N D

Sweet 16 (後書き)

遅くなりましたあーT T

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3241g/>

my sweet sweet darling

2011年10月5日10時07分発行